



Veritas No.37(2008.3.14)

目次 (敬称略)

<特集「元気になる本」に寄せて>

真栄平 房昭 (図書館長)

<特集 元気になる本>

鵜野 ひろ子 (英文学科)  
飯田 祐子 (総合文化学科)  
余 六一 (総合文化学科)  
若本 明志 (音楽学科)  
生野 照子 (心理・行動科学科)  
片木 華枝 (文学研究科)  
今西 聡子 (文学研究科)  
沈 竑 (文学研究科)  
吉本 智恵 (文学研究科)  
永久保 晴子 (図書館職員)

<研究室から>

吉田 純子

<史料室から>

佐伯 裕加恵

<大澤資料について>

増永 智子

清水 裕子

松川 峰子

高野 雅子

牛尾 晶子

田中 聖子

<ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション (10)>

松村 昌家

無断転載を禁ず

## <<特集>> 「元気になる本」に寄せて>

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

卒業や新入学のシーズンを迎えるにあたり、「元気になる本」というテーマで特集を組みました。苦しいとき、悲しいときに読めば、不思議に元気が湧いてくる。勇気づけられ、励まされ、心に響くような本を皆さんに紹介したい、と思ったからです。

ストレスの多い現代社会に生きるなかで「元気になる本」は、精神医学や心理学の分野に限らず、もちろん多様なジャンルがあります。その中で、詩歌の世界に目を向けると、俵万智編『あなたと読む恋の歌 百首』（文春文庫）は、オススメの一冊です。「朝日新聞」日曜版に二年間にわたり連載された記事をまとめたもので、連載中から全国の読者の大きな反響を呼びました。この本は恋の短歌から百首を選び解説したもので、“恋愛の歌人”俵万智の歌を選ぶセンス、ユニークな解釈と鑑賞、軽妙な文章の魅力にあふれています。幸せな気持ち、せつない気持ち、失恋のつらさ、いろいろな恋のシチュエーションの歌が収められており、男女を問わず、どれも心に残る素敵な歌ばかりです。「現代の百人一首」として、世代を超えて読み継がれる作品だと思います。たとえば、こんな歌があります。

一度にわれを咲かせるようにくちづけるベンチに厚き本を落として

俵万智は、こう言っています。「本を置くのではなく、落とす。『厚き』からはわりと生真面目で物静かなタイプの男性が想像される」。『厚き』は「たった二文字だけれど、相手をさりげなく描写して、効果的だ」。たしかに、この歌からは若者の性急さがよく伝わってきます。

早稲田大学在学中、短歌に興味をもった彼女は、1987年に刊行された最初の歌集『サラダ記念日』で鮮烈なデビューをかざりました。280万部を超えるベストセラーとなった本書は、一般人の短歌に対するイメージを身近なものに変えました。その後、彼女はさまざまな苦難や曲折をへて、「結局どれだけ人生を味わったか、それが短歌の味わいになるのだろう。体験そのままが歌になるわけではないが、心が深く沈めば沈んだぶん、歌の丈が高くなるような気がする」と、新聞のエッセイに書いています。

こうした歌集だけでなく、俵万智は古典をやさしい身近なものとして紹介した作品にも定評があります。紫式部文学賞の『愛する源氏物語』（文芸春秋）、『恋する伊勢物語』（ちくま文庫）、『チョコレート語訳みだれ髪』（河出文庫）等を手がかりに、恋の歌でつづる日本の歴史を探訪してみたいはいかがでしょうか。

### <略歴紹介>

俵万智（たわら・まち）1962年大阪府生まれ。早稲田大学在学中に短歌を始め、佐佐木幸綱氏に師事。88年『サラダ記念日』で現代歌人協会賞。96年から読売歌壇などの選者。

## <特集 元気になる本>

鵜野ひろ子 英文学科教授

最近読んだ2冊をご紹介します。

一冊目は、「日本の名随筆」シリーズの別巻、落合恵子編、『女心』（作品社、1998年）という随筆集です。明治生れの日本画家上村松園や、歌人と謝野晶子から、現代の橋本治、蔦森樹まで、36人による36篇の随筆が収められています。様々な時代背景、社会環境の中で、異なる年齢・立場の女性が、娘として、女として、母としての喜びや、悩み、憤りなど、心の動きを赤裸々に語っています。また男性も女性について語っています。表紙の「女心」という文字の横に「？」が添えられていますが、次々と読み進むうちに、「女心」という既成概念が消え、女としてというより、人間としての様々な精神状態を疑似体験できるように思います。誰でも人生の中で、いろいろな問題をかかえますが、その様なときに、この中の随筆のどれかが、何かしらヒントを与えてくれると良いと、願っています。

もう一冊は、私自身が大いに叱咤激励されたもので、Arthur Sherburne Hardy, *Life and Letters of Joseph Hardy Neesima* (Boston: Houghton, Mifflin, 1892)です。同志社大学の創設者である新島襄の手紙とその解説からなっています。彼は江戸時代末期、米国には身分差別がないことを聞き、神の前では皆平等であるというキリスト教を学びたいという理由で、密航します。ほとんど無一文のまま、日本の掟を破って、函館から米国籍の船で上海に行き、そこからまた別の船で、1865年にボストンにたどり着くのです。その後は、富豪のアルファス・ハーディー氏の庇護の下、アマースト大学で学び、開国した日本に帰国して、教育に後半生を捧げます。私が感動したのは、碌に英語を話せなかった彼がハーディー氏やその夫人に書いた数多くの手紙です。ハーディー氏に出会った当初、自分の生い立ちやアメリカに渡ろうとした理由を書いた手紙はたどたどしい英語で書かれていますが、彼の誠実さやキリスト教を学びたいという熱意が伝わってくるものです。そして、手紙を書く度に英語がどんどん上達していくのがわかります。しかも礼儀正しく、感謝の気持ちがこもっていて、高貴な人柄がにじみ出ているのです。英語を身につけると同時に、人格がさらに磨かれていったのでしょう。新島襄の勇気や努力に感動しただけでなく、このような人柄だったからこそ、ハーディー氏が援助を決意したのだということがよくわかりました。

### 林芙美子の『放浪記』

これから旅立つみなさんへお勧めしたいと思うのは、林芙美子の『放浪記』です。

林芙美子は、たいへん貧しい環境で育ちましたが、自分で自分の学費をまかないながら作家になるという夢を持ち、ついにはそれを実現した作家です。『放浪記』は、一九歳から五年間、まだ無名の芙美子が書きためていた「歌日記」からところどころを抜き出して書かれたもので、これで彼女は一躍有名になりました。セルロイド工場の女工やカフェの女給など、さまざまな仕事を転々とする貧乏生活を送りながらも、決してへこたれない強さで毎日をごしていき、微笑ましくも勇ましい姿が描かれています。詩と散文とが入り交じり、時間の順序もばらばらに短い断片が重ねられているので、どこからでも読めますし、どこでも読み止めることができます。気ままにふと開いてみることのできる本なのです。

芙美子は貧乏で寂しい気持ちになれば、男の人に惹かれることもあります。といって、それに自分を任せてしまえるかというところではない。たとえば、「さあ男とも別れだ泣かないぞ！/しっかり旗を降ってくれ/貧乏な女王様のお帰りだ」という具合。やっぱり一人で戦っていきます。「矢でも鉄砲でも飛んでこい/胸くその悪い男や女の前に/芙美子さんの腸（はらわた）を見せてやりたい」と歌います。遠くで行商をしている母のことを心配したり、甘えるような言葉が書き連ねられたり。母を想う気持ちは、彼女を支えています。また彼女が、どんなにたいへんな毎日でも夢を持ち続けていられるのは、自分を別の視線で見つめ直す力を持っているからです。たとえば、「私は、これからいったい何処へ行こうとしているのかしら……駅々の物売りの声を聞くたびに、おびえた心で私は目を開けている。ああ生きることがこんなにむずかしいものならば、いっそ乞食にでもなって、いろんな土地土地を流浪して歩いたら面白いだろうと思う。子供らしい空想にひたっては泣いたり笑ったり、おどけたり、ふと窓をみると、これは又奇妙な私の百面相だ。ああこんなに面白い生き方もあったのかと、私は固いクッションの上に座りなおすと、飽きる事もなく、なつかしくいじらしい自分の百面相に凝視（みい）ってしまった。」というように。いつのまにか、辛さから離れて、自分を楽しむ術を持っているのです。

みなさんは、林芙美子のような（実際すさまじい）苦勞をすることはないかもしれませんが。けれど、誰にでもたいへんな時期というものはあるでしょう。そんな時には、『放浪記』を覗いてみてください。元気になる術、生き抜く力が溢れています。

余 六一 総合文化学科客員研究員

《鋼鉄はいかに鍛えられたか》〈上〉、〈下〉

ニコライ・アレクセーエヴィチ オストロフスキー (著), 横田 瑞穂 (翻訳)

出版社: 新日本出版社 (1986/11)

ISBN-10: 4406012036

ISBN-13: 978-4406012034

発売日: 1986/11

著者: オストロフスキー、ニコラーイ・アレクセエビチ (1904-1936)



Ostrovskii, Nikolai Alekseevich

Островский, Николай Алексеевич

ウクライナに生まれ、罐焚き、水夫などの労働のかたわら、小学校教育だけを終えた。1919年、赤軍に志願して国内戦に参加したが、翌年重傷を負って除隊し、以後は政府活動に専念した。1924年に共産党に入党する。27年からは寝たきりの生活に入り、翌年には視力も失われた。それをきっかけに創作をはじめめる。自己の生き方や思想形成を主人公パーベル・コルチャーギンに投影した自伝的長篇「鋼鉄はいかに鍛えられたか」(1932-34)を書き、1人の青年が革命と国内戦のなかにいかに自覚的な共産主義者に育っていたかを示した。長篇「嵐に生まれ出る者たち」第1部を完成したところで、三十二歳の生涯を終った。

\* 「ロシア文学」 <http://www.geocities.co.jp/Bookend-Ango/7795/index.html>より引用

周知のごとく、「鋼鉄はいかに鍛えられるか」という小説はロシアの有名な作家オストロフスキーが書かれた小説である。作者がロシアの国内戦当時経験し又見聞した歴史を描いたもので、20世紀30年代のロシア文学では優れた作品であるが、今でもたくさんの人

に読まれている。オストロフスキーにあって読者を打ったものは、その不撓不屈な意志で自分の生命を可能なあらゆる方法によって階級の発展のために役立てようとした現実の姿であると言えよう。その魅力は芸術的価値のほかに、主人公ゴルチャーギンが尊敬すべき生命の意味の理解者、実践者としての、人生の価値に対する思考、強靱な意志、崇高的な人格にあると思う。特に、「人間にあってもっとも貴重なものそれは生命である。それは人間に一度だけあたえられる。あてもなくすぎた年月だったと胸をいためることのないように、いやしい、そしてくだらない過去だったという恥に身をやくことのないように、この生命を生きぬかなければならない」という名言は、無数の若者を励ましているようである。

私はこの小説との出会いは高校のときであった。先生は国語の授業で「鋼鉄はいかに鍛えられるか」という小説及び作者オストロフスキーを紹介してくれた。当時 50 人もいるクラスなのだが、本は一冊しかなかったのだから、順番に読まなければならなかった。みんな順番が回ってくる日を楽しみにして待っていた。当時は現在と違って、そもそも本そのものがそれほど多くなかったし少なかったから、読みたい本や好きな本があっても買うことはもちろんのこと、借りることも簡単にはできない時代であった。待つ、待つ、とうとう私の番になった。まるで秘宝でも得たかのように大喜びして、読み始めたが、すぐ夢中になってもう手から離せないようになってしまった。主人公が人生に対する情熱や執着、恋人に対する愛などをじっくり味わいながら毎日毎日をたわいなく過ごしていた。「肉体的には殆どすべてを失い、残されたものは青年の消し難いエネルギーと、わが党、わが階級に役立つ何等かの仕事をしたいという情熱のみである」と書かれたように、新しい社会の建設のため、ヒロイズムと献身の熱情に燃える主人公にすっかり魅了されて、その健闘や喜怒哀楽さえもこの身で体験したようで、実に一生忘れられない体験でもあった。オストロフスキーは二十三歳で健康を失い四肢の自由を失って後病床に釘づけにされ、ついに一對の輝かしい眼も奪われたが、にもかかわらず強い頭脳と意志によって、自己の生き方や思想形成を主人公パーベル・ゴルチャーギンに投影し、自伝的長編「鋼鉄はいかに鍛えられたか」を書いたのだ。根気が限りない力を持っているのを見せてくれた。四肢健全なのに、ちょっとでも困難に出会ったら、すぐしり込みして逃げてしまう自分は恥ずかしくてたまらなかった。あれから、ゴルチャーギンという人物がずっと私を励ましてくれて、人生の難関を乗り越えてここまでやってきたのだ。

若本 明志

音楽学部長 音楽学部教授

《地図帳》

《犬と私の10の約束》川口 晴 著／発行所：文芸春秋／2007年7月30日

図書館から「元気になる本」を推薦しろとの注文だが、定年を迎える年寄りにもっと相応しいテーマはないんかいとボヤきながら、元気になる...ということを考えてみた。元気になりたけりゃスタミナ料理のレシピ集や体力増強のトレーニング法入門編でも読めば...と思ったりもするが、どうやら図書館の注文はそんなことではないらしい。

そこで先ず、私自身が精神的に疲れていたり、気が晴れない時はどうしているかと考えてみたら、わりと趣味の世界に逃げ込んで気持ちのリフレッシュを図ることが多いようだ。同じように、趣味の関連書を読んでいる時なども、その世界に気持ちが遊ぶというか解放感を得られることが多いと思う。この方法が万人に有効かどうかは判らないし、仮に有効だとしても趣味は人それぞれであるから、ここで私の趣味なんかを紹介しても始まらないだろうが、まあ、私が元気を取り戻す一助としている方法や、最近読んだ本などを紹介させていざこうと思う。

最初に挙げた《地図帳》だが、小学生時代、同級生と《地図帳》の同じページを開き、片方が言った地名を探しっこする遊びがきっかけで《地図帳》を見るのが好きになった。ただ、私の地図の楽しみ方は専門的に地図を見るのではなく、地図を見ながら、それがどんな場所か想像して楽しむのである。後日、実際にその場所を訪れてみると、実際が想像とは全く違うことがあるが、それもまた楽しい。一冊の《地図帳》で想像を膨らませ、のんびりした時間を得られるのだから、これは安上がりだ。

この《地図帳》を見る楽しみのほかに、定年後に備えて趣味を持とうと考え、幾つかのことに手を出した時期がある。カメラ、釣り、自転車で町中を走ること...どれもモノにならなかった。

15年前に女学院キャンパスで生まれた雑種犬を買って帰り家で飼っているが、折に触れ相手をしていると本当に楽しく心が和む。(子供たちが名付け親となった愛犬ジョリーは、最近ではヨボヨボの老犬になってしまった。)

ペットを趣味と呼ぶことは憚られるが、犬の誠実さは、人に素直な気持ちや反省する心、また失敗があればやり直そうとする勇気をも与えてくれる。

《犬と私の10の約束》はベストセラーにもなり、愛犬家にはよく知られた本だ。

作者は映画の敏腕プロデューサーであり、次々とヒットを生み出す名脚本家でもある。だからであろうか、ストーリーや細かいディテールは映像化するに相応しいし、事実、今春には映画化され公開されるらしい。

可愛い子犬時代から成犬、老犬となるまでの写真がカットとしてたくさん載っているの

も、愛犬家にはうれしい。

生野 照子 心理・行動科学科教授

Rosemary Shelly 編「Anorexics on Anorexia」

Jessica Kingsley Publishers, 1997

摂食障害は、大きく2つのタイプに分けて考えられることがある。その一つは「中核群」といわれ、重い精神病理や心の傷が主因となって発症するタイプである。かつて「思春期やせ症」と呼ばれ、拒食による著しい低体重を主症状とするタイプもここに含まれる。他の一つは「ダイエット群」といわれ、痩身を目的として誤ったダイエットを行った結果、心身のバランスが崩れて発症するタイプであり、排出行動を伴う過食に移行することが多い。現代において世界的に増加しているのはこうしたダイエット群であり、中核群の発症率は従来からあまり変化していないといわれている。

さて本書は、いわゆる中核群として様々な精神的問題を抱えて発症した人々による手記である。病を通して洞察を深めていくプロセスは、まさに彼女たちの人生そのものだといえる。本書に含まれるテーマは、○同じ病気であっても、同じ治療が適切とは限らない ○患者それぞれのプロセスがあり、それぞれの治り方がある ○回復は簡単ではないが、不可能ではない ○摂食障害は、食の症状が心の苦しみや傷つきを代弁しているのである ○患者は自分の病気のエキスパートである などである。

私はこの本をロンドンで購入したのだが、摂食障害治療に新しい観点を見つけるきっかけとなった。当事者の切々たる体験談を何度も読み返して線を引き、本の空白に私の思いを書き込んだため、クタクタに汚れてしまったので2冊目を購入したくらいである。その意味で、本書は私の治療者としての記念碑であるといえる。

この本を読んでからは当事者の力量を確信し、関わっていたセルフヘルプ活動を力強く進めることができた。また、発症者が病気と闘う過程で自問自答を繰り返し、激しい怒りや低い自己評価を乗り越えて、自分を受け入れ自分を愛することができるようになることが回復であると確信することもできた。したがって回復は発症からはじまるのであり、病気の体験が真の自分を見つけさせてくれるのだと考えるようにもなった。摂食障害に関する本は和洋書合わせて数えきれないくらい持っているが、その中でもこの本は私にとって飛びきり大切な一冊である。

片木華枝 文学研究科院生

「心に響く本」

小林秀雄「モーツァルト」 『モーツァルト・無常という事』所収、新潮文庫、昭和36年

「ゲオンがこれを *tristesse allanante* と呼んでいるのを、読んだ時、僕は自分の感じを一と言で言われた様に思い驚いた (Henri Gheon ; Promenades avec Mozart.)。確かに、モーツァルトのかなしさは疾走する。涙は追いつけない。涙の裡に玩弄するには美しすぎる。空の青さや海の匂いの様に、「万葉」の歌人が、その使用法をよく知っていた「かなし」という言葉の様にかなしい。こんなアレグロを書いた音楽家は、モーツァルトの後にも先きにもない。」

小林秀雄の「モーツァルト」にある、大変有名な、美しい一文である。私がこの作品と出会ったのは今から十三年程前のこと、当時所属していたアマチュアのオーケストラで指揮をなさっていた先生が、或時下さった色紙、そこに記されていたのが五線譜とこの一節だった。私は、頂いた言葉の美しさに、打たれた。当時オーケストラではしばしばモーツァルトの交響曲を演奏する機会があったのだが、その良さがいま一つ分からなかった自分にとって、これは、はっ、と振り返らされるような体験だった。言葉に触発され、弦楽五重奏曲第四番ト短調のCDを買い求め、聴き、その時私は初めてモーツァルトに触れたような気がした。次いで、全文を読むべく文庫の『モーツァルト・無常という事』を手にとった。今となっては当時そこに見たものを思い出すことは出来ないが、ただ、言葉の一つ一つが圧倒的に美しかったという単純な感触だけが残っている。それから暫くして、この作品と接することは無くなった。

だが昨年、一つのきっかけから再び「モーツァルト」と向かい合う機会を得、十数年ぶりにこれを読み返して、今度は批評の総体と細部、その在りように感じ入った。件の一節は印象の中心には座らず、作品のあらゆるところに潜む鋭い美（或いは正確さ）の一部のように捉えられた。そして、「何故、死は最上の友なのか。」より続く最後の部分に、何とも言えないかなしさを覚えた。少なくとも自分にとって、この書物は「かぶれ」て後卒業するものではなく、離れて後何度も戻ってくるものであることが分かった。もし、この作品を音楽評論のような種類の何かと見做してしまうなら、そこから先は何も見えなくなるような気がしてならない。

「モーツァルト」は、熱を秘めた批評だ。

では、その熱とは何だろう。それは、著者が自らの向かい合う対象に心からの敬意と信頼を寄せ、それを示すことによって、波動のような、何か動的な力が、作品全体へと漲るところに生じているものではないかと思う。そして又、この作品は批評であると共に、そう在るに相應しい時と場に於いて著者とモーツァルトの間に交わされた、より私的で親密

な対話にも見える。両者の間にこそ熱を帯びたものがく生きて>おり、それが読者へと迫り来て、確かな刻印をここに残すのではないか。私は、そのように感じるのである。

今西 聡子 文学研究科院生

「超訳」で綴る『小さな恋の万葉集』

「万葉集」と聞くと、遙か昔の別世界をイメージする人も多いのではないかと思います。確かに、オオトモノヤカモチやカキノモトノヒトマロを友達のように感じる…わけにはいきません。ところが、万葉学者上野誠氏の「超訳」にかかると事態は一変します。オオトモノヤカモチの肩をポンと叩き、「ヤカモチくん！あなたの気持ち、よくわかります」と慰めてあげたくなるのです。何はさておき、まずはオオトモノヤカモチの歌を一首ご紹介しましょう。

人もなき	ひともなき
国もあらぬか	くにもあらぬか
我妹子と	わぎもこと
携ひ行きて	たづさひゆきて
たぐひて居らむ	たぐひてをらむ

(大伴家持 巻四の七二八)

この歌を、上野誠先生は『小さな恋の万葉集』(小学館、2005年)の中で次のように「超訳」しています。

ふたりのほかに  
だーれもないお国が  
どっかにないんやろか…  
あの子とふたりっきりで  
手に手をとって  
デートを楽しめるお国はないんかい！

大伴家持は大伴一族の御曹司で、当時この恋は「芸能人の熱愛発覚」並に噂になったようです。それだけに、家持は誰にもジャマされない世界で二人きりになりたかったのでしょう。しかし、誰にもジャマされない世界を探す気持ちは、1300年経った現代も同じです。「二人っきりになれる所はないんやろか…」と思う時、「人もなき国もあらぬか」と歌った

大伴家持の気持ちがしみじみと実感されることでしょう。  
また、こんな歌もあります。「超訳」と共に御紹介しましょう。

玉かぎる	それはまさに一瞬の光一
昨日の夕	昨日それも夕方
見しものを	逢ったばかりなのに
今日の朝に	今朝にはもう
恋ふべきものか	恋しく思っている

(柿本人麻呂歌集歌 卷十一の二三九一) そんなわたしでイイノカナ・・・

「そんなわたしでイイノカナ…」が光っています。「昨日チラッと逢っただけなのに…」と自嘲するような気持ちもあるのですが、それよりも、湧き上がってくる感情に自分でも驚き、ちょっと困っている感じが伝わってきて、ほのほのとした気持ちになります。それに、じっくり温めた恋であっても、昨日の夕方逢ったばかりなのに朝になったらもう逢いたくてどうしようもないとしたら、やっぱり「そんなわたしでイイノカナ」と思ってしまふ…の…では…ないか…な? 「そんなわたしでイイノカナ…」は、理性が利かなくなってしまうと戸惑う男女に、暖かく優しいまなざしに向けた名訳、と言えるのではないのでしょうか。

『小さな恋の万葉集』はホームページ上でも楽しめます。そこで最後に、上野先生のホームページの中から、心がポッと温かくなるような「超訳」を一首…。大切な人と過ごす時間は、びっくりするほど早く過ぎるものです。そんな気持ちを詠んだ歌…

秋の夜を	秋の夜は
長しと言へど	長いなんて言いますけれど
積もりにし	溜まりに溜まった思いを
恋を尽くせば	二人で語り尽くそうとすりゃ
短かりけり	そりゃ…短いもんですよ

(作者未詳 卷十の二三〇三)

沈 竑 文学研究科院生

## 印象に残る本—『五体不満足』

「元気になる本」というテーマで原稿の依頼があった時、正直、そんな本があったら私に紹介して欲しいと思いました。最近色々あって、とりわけ研究は自分の思うようになかなか進んでいませんでした。何日も過ぎてしまい、私は本棚を眺めながら、頭の中に「あの本」が浮かびました。十年ほど前、日本に来たばかりの時のことが思い出されました。きのうのように鮮明に覚えています。「そうだ！あの本だ！」と私はその瞬間にひらめきました。

「あの本」とは、乙武洋匡の『五体不満足』（講談社、1998）です。すでに読んだ人も大勢にいると思いますが、『五体不満足』は出版されてすぐにベストセラーになり、200万部を突破していると言われています。著者は先天性四肢切断という障害を持って生まれました。本書の表紙は、著者が車椅子で横断歩道を渡っている写真になっています。手足がなく、上半身と顔だけがあって、読者に向かって笑っています。この写真を初めて見た人は、きっとビックリするでしょう。また、本書のタイトル『五体不満足』という言葉もショッキングでしょう。なによりやはり本書の内容です。著者が生まれた時から、小学校時代、中学・高校時代、大学時代までのことが書かれています。これらのエピソードを読むと、感動しやすい私は涙が止まりませんでした。しかし、ユーモアがあって、時には笑ってしまいました。内容は軽くないですが、軽く読むことができます。

先日、インターネットで「五体不満足」というキーワードを入れてみたら、なんと70000件以上ヒットしました。その中には本書の紹介以外に、感想文もたくさんありました。今でも人気があることが窺えるでしょう。しかし、私にはこの本に特別な思いがあります。

八年前、私は神戸女学院に留学することにしました。筆記試験は順調に終わり、面接の時のことでした。色々な質問をされましたが、「最近何の本を読みましたか」と聞かれた時、私はしばらく困ってしまいました。中国の本だったら、先生がわからないかもしれない。自分がうまく説明できる自信もない。日本の本だったら、「何がある、何がある・・・」と頭がぐるぐる回って、口に出たのが『五体不満足』でした。その当時、『五体不満足』は雑誌にもテレビにも盛んに紹介されていました。内容はだいたいわかりました。今になって言えることですが、実は、本は読み終わっていませんでした。『五体不満足』は私が初めて丸一冊を読みきった日本語で書かれた著書です。ルビがたくさん振ってあって、私の日本語の勉強にも役に立ちました。『五体不満足』は私が神戸女学院に留学する出発点になった本なのです。

この度、私は『五体不満足』をもう一度読みました。「温故知新」という言葉にあるように、私は今の自分が置かれている状況を再確認し、また勉強できることを感謝して、

自分ができることをまずしようと改めて決心しました。

吉本 智恵 文学研究科院生

『近世地域史フォーラム② 地域史の視点』2006、吉川弘文館

『近世地域史フォーラム③ 地域社会とリーダーたち』2006、吉川弘文館

私が大学院進学を迷っていた時、自分の背中を一押ししてくれたのがこの本である。当時の私は、教師として生徒に社会を学ぶ大切さを伝えるため、試行錯誤を繰り返す毎日であった。ちょうどその頃、故郷で歴史研究をされている方の紹介でこの本を読み、私が卒業論文で取り組んだ地域史の分野で現在研究されている人々の活躍および内容に大きな刺激を受けた。特に、第2巻の西向宏介氏の「地域の商人活動と領主政策」は印象深い研究であった。西向氏の研究対象は東播磨領国地域（加東・加西・加古・美嚢・多可の5郡）であった。これらの地域は私の卒業研究の対象であった山崎藩（西播磨地域）と隣接しており、山崎藩の近隣地域も同じく領主支配が錯綜していることから類似性が見受けられた。この論文により、卒業論文に欠けていた他藩との比較検討の必要性を感じた。

また、第3巻で取り上げた落合功氏の「地域を担うリーダー」も注目した研究であった。落合氏の研究対象は高松藩領における久米栄左衛門である。この論文から、一人の人物に焦点をあて、そこから地域の歴史を研究する方法に興味を持った。どの時代でも、それぞれの地域に生きた人が存在し、その人数分の歴史がある。それらの歴史が重なり合い、積み重なることで現在につながる。この論文により、歴史の表舞台に出てこないような人々に注目した研究の有用性を感じた。

これらの本に出会った後、自分が取り組んだ卒業論文を読み直すことで、課題点に気付くとともに知識の幅を広げたいと思い、大学院進学を決意した。大学院において、私はこれらの本から学んだ論理展開を活かした地域史研究に取り組みたいと考えている。

永久保 晴子 図書館職員

元気になる本 ー読み物コーナーからー

『朝2時起きで、なんでもできる!』 枝廣淳子著 サンマーク出版 2001年

『妹たちへ』 日経ウーマン編 日本経済新聞社 2005年

図書館には、レポートや卒論の為の資料を探しに来る方が多いと思いますが、本館には話題の書物や、将来の進路を考える際に役立つ本を集めた読み物コーナーがあります。今回は読み物コーナーから「元気になる本」をご紹介します。そこで問題です。下に記すのは、とある3人の女性の20代の頃のエピソードですが、皆さんよくご存知の方もいます。誰だと思いますか？

Aさん…英語が嫌いであまり苦手で、外国人講師の授業は代返を頼んでサボり、29歳まで外人を見ると逃げていた。

Bさん…留学しようとアルバイトに明け暮れていた大学3年生の時、タダでアメリカに行けるという事で、テレビのレポーター役を引き受けたものの、マスコミに興味があったわけではなく、結果は惨憺たるもので、「下手くそ」「学芸会じゃないんだぞ」と叱られる度に、あたりかまわず泣いていた。

Cさん…大学の漫画研究会時代、ギャグ作品を手塚治虫氏に「彼女の才能は、すごい。尊敬に値する」と評され、天狗になるも、自分が一年に一作しか面白い作品を思いつかないことに気づき、挫折する。

答えは、Aさんは、同時通訳者で環境ジャーナリスト、アル・ゴア著『不都合な真実』の翻訳者でもある、枝廣淳子さん。Bさんはニュースキャスターの安藤優子さん。Cさんは『東京ラブストーリー』の漫画家、柴門ふみさんです。

枝廣さんの著書『朝2時起きで、なんでもできる!』には、英語が苦手だった枝廣さんが、同時通訳者になることを思い立ち、試行錯誤しながらの猛勉強の末、通訳者としての扉を開き、更に環境問題へとフィールドを広げていくまでを綴ったものです。

29歳まで外人をみると逃げていた人が、どうして同時通訳者に？と不思議に思う方が多いと思います。ご自身も、当初は自分の英語力を思うと恥ずかしくて人に言えなかったとか。

しかし、なぜ枝廣さんは目標を達成できたのでしょうか？そこを丁寧に読み進めていくと、目標の立て方、ヴィジョンの作り方、あせらず、くさらず、たゆまず進める為のシステムなど、やはり明確な理由があることが理解できます。

例えば、個人においても、組織においても有効なバックキャストという考え方。

これは、後の通訳の仕事の中で、スウェーデンの環境NGOから教えてもらったのですが、現状がどういう問題に直面しているかはさておき、まず理想像を思い描き、そこから振り返って、今、何をすべきかを考えるというもの。知らずして、枝廣さんは、同時通訳という高い目標地点からみて、現状とのギャップをどのように埋めるかということを考え、一步一步、アプローチしていく過程の中で、このバックキャストिंगを実行していたという訳です。

自分にあった語学の勉強法の選び方、一日に三カ所を駆け持ちすることもあるという多忙な通訳者の日常や裏話、環境シンクタンクであるワールドウォッチ研究所のレスター・ブラウンとの交流など、とても興味深く読むことができますが、何よりも、物怖じせず、どこまでも前向きに突き進む枝廣さんの姿勢が、元気を与えてくれる本です。

安藤優子さん、柴門ふみさんのエピソードは、各界で活躍する女性が、3カ月にわたりエッセイを担当する、『日経WOMAN』の連載「妹たちへ」を、集めた本からです。（この雑誌は図書館で購読しており、連載は現在も継続中です。）

作家、脚本家、イラストレーター、起業家、県知事等々、職業もさまざまなら、既婚、未婚、シングルマザーと女性としての生き方も多様な27人が登場し、簡潔な文章の中に、表面だけでは窺い知ることのできない、葛藤や苦悩を抱えつつ生きる、一人の人間としてのその人の姿を垣間見ることができるようになります。そして、それぞれの歩んだ道程から紡ぎだされた「妹たちへ」のメッセージはどれも力強く心に響きます。

お二人のように思いもかけない出来事や挫折は誰の人生にも起こり得る事。しかし、その後どのように歩まれたかは、続きを読んでみてください。

人や仕事との出会いと同じように、いつ、どこで、生涯の糧となる本、元気を与えてくれる本に出会えるかはわかりません。是非、図書館を十二分に活用してください。そして質問があれば、どんどん図書館員に尋ねてみましょう。きっと親切に！答えてくれる事でしょう。

## <研究室から>

吉田純子 英文学科教授

これまで、私はアメリカの児童・思春期（ヤングアダルト）文学を中心に、思春期文学に表現される女性像・男性像を、ジェンダー観点から文化論的に研究してきました。そして、二年ほど前から、特にアジア系・アメリカ文学の作家、Yoshiko Uchida、Jeanne Wakatsuki Houston、Kyoko Mori、Cynthia Kadohata ら日系作家や、Richard Kim、Sook Nyul Choi、Linda Sue Park ら韓国系作家の作品に関心をもつようになりました。

ところが、最近、別の日系作家 Yoko Kawashima Watkins の *So Far from the Bamboo Grove* (1986) [『竹林からはるかはなれて』] がアメリカ社会のみならず、韓国、日本のネット上で物議を醸し出していたことを知りました。カワシマ・ワトキンズの作品は、日本による植民地時代の朝鮮半島北部の羅南（ナム）で日本の敗戦を迎えた日本人少女ヨーコ（11歳）が母親と16歳の姉とともに、戦後の混乱期に死線を乗り越えて朝鮮半島を縦断し、釜山港から福岡港をへて、京都に辿り着くまでの苦難の日々を描いています。この作品は、著者自身が朝鮮半島から引き上げるなかで体験した飢え、寒さ、死の恐怖の記憶を自伝的に描いたものです。本書をめぐる波紋の広がり、次のような経過をたどりました。

2006年10月に、アメリカ合衆国ボストン近郊の中学校で、英語教材として用いられていたアメリカ図書館協会の推薦図書 *So Far from the Bamboo Grove* に描かれる韓国人像をめぐる、韓国系の子もたちの家族から教科書として使用することに、抗議の声があがりました。物語の主人公ヨーコの家族がソウルや釜山で難民生活をする描写のなかに、日本人引揚者の娘に暴行を加え、レイプする場面が何度か描かれていることが指摘され、この箇所を読んだ韓国系の生徒は、自分の民族のイメージにショックをうけ、親に涙ながらに訴えたというものです。また、本書には、1945年終戦前での、朝鮮人の共産軍兵士や朝鮮北部の町への米軍の空襲など、歴史的に不正確な記述も多々みられるということで、この本をめぐる波紋は、2007年の3月頃まで、ニューヨーク、ロサンゼルス、韓国、日本のネチズンたちの間に賛否両論の論争を巻き起こしていきました。

本書は韓国でも『ヨーコさんの話』のタイトルで翻訳出版されており、原書は、ソウル・ヨニ洞の外国人学校等で英語教材として使われています。日本語への翻訳書は出版されておらず、おそらく日本の児童文学界での層の厚い熱心な韓国・中国関連の児童文学研究者や出版社の間で、本書の翻訳を自主規制したものと思われます。本書をめぐる波紋は、米韓日のネチズンの議論がかまびすしいさなかに、ハーバード大学のカーター・エカート教授（朝鮮史）のエッセイ「コンテクストの問題」（『ボストン・グローブ』誌に掲載）を契機

として、沈静化していきました。エカートは、本書のみを子どもに読ませるのではなく、たとえば、リチャード・キムによる Lost Names (1988) [『名前を喪って』] のような同時期を扱う韓国系作家の作品と比較しながら、この時代の歴史・社会・文化的文脈（コンテクスト）において読むべきである、というもっともな提案をしました。

この論争の底流には、日韓の相互不信、他者への無理解、民族中心主義が横たわっているように思われます。おりしも、大仏次郎文壇賞を受賞した朴裕河(パク・ユハ)の『和解のために―教科書、慰安婦、靖国、独島』(平凡社)は、日韓の間に横たわる同様な相互不信、無理解、ナショナリズムの問題を説得的に緻密に論じています。

ところで、私は、2008年6月にアメリカのイリノイ州で開催予定の国際学会 Children's Literature Association で、“War and the Aftermath of War in Northeast Asia” [北東アジアの戦争・戦後] という、この学会で初のアジア系のテーマをもつラウンドテーブルを設けました。この時期の中国・台湾・韓国・日本での戦争とその直後の人々の生活を描く文学作品を取りあげ、各国の参加者が発表することになりました。とても楽しみにしています。

## <史料室から>

佐伯 裕加恵 史料室職員

### 卒業生の手記に見る初期神戸女学院

「歲月流るるが如く、吾等が愛する母校を出でて世の波風の中にいりてより既に三十年の霜星を経たり。十年を一昔と数ふれば恰も三世を隔つる思い無きにあらず爾來物は移り人は変り其の當時を回顧すればうたた今昔の感に堪えざる所なり。」

同窓会誌『めぐみ』第55号(1913年3月発行)は第1回卒業級記念号として出され、1回生の手記や消息が掲載されている。これはその内の1つの書き出しである。手記の主は第1回生(1882年卒業)渡邊 常氏。学校卒業後、アメリカのカールトン カレッジに留学、帰国後神戸女学院の教師(数学、理科担当)を務めた。渡邊氏の手記には当時の授業や先生方のことが記されており、明治初期の学校の様子を知る貴重な史料となっている。今回はこの手紙の紹介を通して最初期の神戸女学院の姿を見てみたいと思う。(手

記は原則そのまま転記するが、旧字は現代字に改め、必要に応じて旧仮名使いを書き換え、句読点の追加等を行なっている。[ ] 内は編者の加筆である。）

初期の授業は次のようなものであった。「当時米国婦人故ミス、タルカット、ミス、ダツレー、ミス、パロスの3教師は英語、聖書、音楽を、故佐治某氏は漢書、習字、作文を、故伊東老姉は裁縫を担当して教授せられたり。」氏の回想によると当時は規則書もなく、校舎は南舎と呼ばれていた寄宿舍兼教室の1棟しかなかった。

「その後ダツレー、パロスの2師は校を辞して専ら市内伝道に従事せられ、その後任としてミス、クラクソン [略]、ミス、ブラウン [略] の来校ありたりき。」「明治12年 [1879年] ごろと覚える。吉田先生の来任を見てより校名も漸く定まり、規則課程も成りて漸くその存在を世に認めらるるに至れり。」この頃校名を英和女学校とし、修業年限は当時の中学校程度である5年と定められた。

「外国教師は聖書、英文典、地理、歴史、生理、修辞学を、新任の山内先生は十八史略、論語、孟子、史記列伝等の漢書、作文、習字を、吉田先生はスチールの原書によりて物理、化学、天文学、ヘブンの心理学、ギゾーの文明史、幾何学、代数、三角術等を担任していづれも熱心に教授の労を取られたり。吉田先生の如きは社会各方面の知識をも得させしとて、特に土曜日新聞通読会を開かれ、先生自ら監督の許に日本新聞は勿論英文新聞迄も通読したり。」英語による授業が多かったことがわかる。

「かくて明治15年 [1882年] 12月22日第1回の卒業生をだせり。」本来なら第1回生は6月に卒業するはずであった。しかし吉田先生の講義が6月までに終わらず、全員が講義終了まで卒業延期を申し出たため、12月卒業となったというエピソードが残っている。卒業論文のテーマは時勢論、智徳論、忍耐論、文明論など多岐にわたるものであった。

「この日、京都同志社教授デビス博士の我等卒業生に与えられし告辞は今猶脳裏に印象せられたり。その主意は英語の卒業式、即ちカメンスメント [commencement] の字義は始めると言う事なり、故に諸子も今日を以て学業を終われりとせず、これより A.B.C. を習い始むる覚悟を以て実社会の学問を勉むべし、現今の社会は諸子を歓迎せず、却りて迫害を加えるやも計りがたけれど只十字架を負いて堅く立てよ云々とて、いとも懇切に訓諭されたり。」

渡邊氏は手記の最後を以下のように締めくくっている。「嗚呼我がクラスは幸にも人生の真意義を教えられ、信仰生活の針路を示され、入学当時夢想だにせざりし貴重なる賜を与えられしは偏に天父の御恵みと幾多良教師の御恩と思えば、うたた感謝に堪えざるところなり。」「吾等は何を為すべきか、何を為さざるべからざるかは各自の考えに任ずべきも只選ぶ所は将来もまた、父なる神の御指導により人は如何にあれ世は如何にあれ、源泉浪々として流れて止まざる水の如く、進んで四海に達するまで世の罪惡と戦い神国建設の事業にいそしみ励むことなり。」

## <大澤資料について>

図書館本館一階史料室の一室で一昨年十二月より整理が始まった「大澤壽人遺作コレクション」は、音楽学部で教鞭をとられた作曲家大澤壽人先生（1906～53）の自筆譜を中心とするものです。同年八月にご子息大澤壽文氏から神戸女学院に寄贈されました。近年再評価の動きがあり、自筆譜の写しや写真などの資料を提供することが多くなっています。

このコレクションの整理作業は、本学非常勤講師生島美紀子先生のご指導のもと音楽学部の卒業生・大学院生6名が中心となって同窓生ボランティアのご協力を得て進められています。そして昨年十二月作品目録『煌きの軌跡 — 大澤壽人作品資料目録』を刊行するに至りました。次は、編曲作品の目録を完成させ、書簡・写真等その他の資料の整理と、楽譜のデジタルデータ化も続けてく予定です。

実際の作業に携わられている6名の方々に作業の様子や感想を Veritas にお寄せいただきました。

増永智子 音楽学部卒業生

作品リストの作成、そして類稀なる作曲家との類稀なる出会い

大学図書館史料室の棚にぎっしり積まれた袋や書物は、陽に当たることなく何十年も大澤家に埋もれていたのだらうと思われるほど、茶色に変色していた。こうした状態にある自筆譜の整理と作品目録の作成に向けて、作業は始まった。その初のスタッフとして私が先ず担当したのは、どの棚に何という曲があるかの確認と整理であった。最初は1曲毎に取り出して、白い袋へ入れ換える作業を行った。しかし、ただ単に作品を袋へ入れていく作業ではなかった。

まず、新しい白い袋の底の、のりしろ部分左端に赤で袋番号を記した。次に、黒で大澤先生ご自身の作品ならばオリジナルの「O」を、他者作品をアレンジした作品であればアレンジの「A」を記入した。続いてタイトル、総譜（スコア）は「S」を、パート譜は「P」の分類も書き込んだ。そして、のりしろ部分右端4センチ程はスペースを空けておき、後に青で曲のジャンル別にID番号を記入していくことになった。

この白い袋に記入する作業と平行して簡易リストの作成も行った。簡易リストとは白い袋の番号、曲のタイトル、スコア/パート譜の区別、頁総数の4点についてのデータを書き取ったリストである。作業を始めた際は、先生の自筆譜を1頁ずつ丁寧に目を通しながらリストの作成をしていた。しかし作業を進める中で、机の前、横、後ろの三方の棚には

未だ手つかずの膨大な作品が残っており、このようなペースで作業をしていると先が見えないと感じるようになった。そして作業効率を上げるため、曲の内容をじっくり見ることは次の段階の作業までお預けとした。これらの作業と共に、曲のタイトル等を記入した白い袋に作品を収めていったのだが、単純に自筆譜を入れていくというわけにはいかなかった。はじめに書いたように、茶色く変化してしまった自筆譜は、経年劣化により汚れがあったため、専用の布を用いて汚れを拭き取ってから袋へ収めていった。

以上のような白袋の記入作業、簡易リストの作成作業、袋への自筆譜収納作業を、一日に約 100 曲の処理をするペースにまであげるよう努めた。成果はあって、2007 年 4 月までの 4 ヶ月間に、これらの作業を終了することができた。ここまでの時点で白袋の総数は 1300 を越え、大澤先生の作品数が 800 以上にもなると判明したのである。

この第 1 段階を経て、増員されたスタッフの仲間と共に第 2 段階の作業に入った。第 2 段階の作業では、まず、楽曲ごとの作品の詳細データをとる作業を行った。簡易リスト作成の際には気づかなかった発見がたくさんあった。作品の詳細データをとる作業は、1 曲ずつ見ていくわけであるが、音符などの楽譜の要素のみならず、先生が楽譜に書き込んだ事柄全てを転記していく作業である。先生の筆致は美しく、手書きであっても見やすい自筆譜である。とはいえ、半世紀以上も前に書かれているため、曲のタイトル、注意事項やメモの書き込みについては、漢字が草書で記入されている場合も多く、楽譜を読むこととは別の意味で大変悩まされた。

この作業過程では、作品それぞれの内容についても一層に明らかになってきた。大澤先生はクラシックの作曲家という枠を超えて、ポップス、ジャズ、レヴュー、放送音楽、映画音楽、歌謡曲、そして社歌や校歌までも作曲なさっている。大澤先生は自作品のみならず編曲をも手掛けられ、その数は 400 近くにもなる。編曲された曲はクラシックの名曲はもちろんであるが、ドミトリー・ショスタコーヴィチやマニユエル・ドゥ・ファリャ、イゴール・ストラヴィンスキーなど、当時の日本ではあまり知られていなかったであろう曲をも編曲なさっている。これらの曲目はラジオ番組に取り上げられ、先生ご自身の指揮により演奏されたのである。

西洋音楽において演奏家としても活躍した作曲家は少なくない。大澤先生もその一人であり、自作、編曲はご自身の指揮により演奏され、発表されたことが当時のプログラムやチラシ、演奏会のポスター、ラジオ放送の音源など、遺された資料から判明している。自筆譜以外にもこのような貴重な資料がきちんと遺されており、その中には先生ご自身が描いた絵画もあり、多才さがうかがえる。

清水 裕子 音楽研究科院生

資料の電子化、そして和と洋の融合に魅せられて

コレクションの整理が進むにつれて楽譜の利用申請に応えるために、自筆譜をスキャナーで取り込む作業が必要となり、パソコンのスキルを生かして私が担当させていただくことになりました。自筆譜には様々な形状があります。五線紙の種類、サイズ、色合い、どれをとっても一つとして同じ物はありません。できるだけオリジナルに近いものを提供できるようにあらゆる工夫を凝らしました。ここで私が試行錯誤の結果、考えたマニュアルについてご紹介します。

まず楽譜の読み込みにおいて、五線紙の種類に特徴を見つけました。留学先のボストンやパリで購入された五線紙は、サイズが定形外であることが多く、読み込み範囲を選択する場合も一枚一枚手作業で行っています。また色合いは、楽譜の保存状態に大きく影響されていて、初期の作品になると経年変化による日焼けも増します。しかし製本されているものに関しては、中の楽譜の変色や劣化も少なく良い状態が保たれていました。楽譜の記載には主に鉛筆・色鉛筆・インクが用いられています。次に、それぞれの質感や筆圧が異なるため、画像編集の段階で微妙な調整を行います。明暗、色調、コントラストなど細部に至るまでオリジナルをリアルに表現できるよう根気のいる緻密な作業に取り組んでいます。

そうして画像編集したデータを JPEG 形式から PDF 形式に変換し保存します。1 作品につき 1 つのファイルにまとめて保存し、PDF 変換用ソフトにかけることで、自動的に PDF 形式で連番に保存されます。これには、3 つの理由を伴います。第 1 に容量の大きい画像データを縮小するため、第 2 に簡単な操作からどのパソコンでも連番で閲覧可能にするため、第 3 に誤作動による画像編集を防ぐためです。楽譜の利用申請があった場合、このような手順を経て PDF 形式で保存されたデータを印刷します。楽譜印刷には、カラーと白黒があり、自由な選択が可能です。楽譜から滲み出る大澤先生のお人柄や紙質の風合いを感じていただくためにも、私はカラーコピーをお勧め致します。皆さまのコレクションの一部に加えていただければ大変嬉しく思います。

大澤先生との出会いから約 1 年を迎えた 2008 年の春、演奏会で先生の作品である《“さくら” の声 Une voix a “Sakura”》を演奏させていただくことになりました。この作品はオーケストラ伴奏とピアノ伴奏の 2 つのバージョンがあります。今回はピアノ伴奏付き独唱譜を用いますが、その伴奏も非常にダイナミックに作られています。

松川 峰子 音楽学部卒業生

ピアノが表現する「音の世界」－ 大澤先生のピアノ作品 －

私は 2007 年の 4 月からスタッフに加わり、まずは、その膨大に積み上げられた楽譜の数の圧倒されました。総数は 800 曲に及び、ジャンルも、管弦楽、室内楽、協奏曲、独奏曲、映画・放送・劇音楽、団体歌、ホーム・ソング、更には編曲も手がけるなど幅広く、わずか 46 年の生涯でこれだけ多数の作品を遺されたことに驚きを覚えました。また、現在では印刷譜が主流な中、直筆譜に触れる体験は非常に新鮮でした。素早く記されたであろう音符の数々は端正で美しく、その筆跡からは音楽の豊かな流れや息づかい、躍動感といった「生」のエネルギーが直に伝わってくるように感じられました。

ピアノ作品は全部で 22 曲ありますが、400 曲を上回る創作品全体の割合から考えれば数は少ないと言えるでしょう。曲の規模も大きくはなく 《3 つのプレリュード》(1933)、《小デッサン集》(1934)、《パターンズ》(1934) などの比較的短い作品が見受けられます。演奏時間が 10 分を超えるものは 《ソナチネ ホ短調》(1928) 約 12 分、《人形のうた変奏曲》(1931) 約 12 分、《円舞組曲》(1945) 約 10 分の 3 曲に留まっています。創作は主にアメリカ、フランスに留学されていた頃(1931－1935)に行われ、作品の幾つかは、パリの室内学会にて披露されたこともありました。

大澤先生が活躍された 20 世紀初頭は、アルノルト・シェーンベルクに代表されるように、伝統的な調性に束縛されない「無調音楽」への試みが行われた時期でした。大澤先生は一部で 《円舞組曲》(1945)、《ワルツ》(1952) などの調性感のある作品を遺されていますが、その他の多くは、調性に留まらず極めて前衛的で斬新な響きがしています。それは 《フーガ》(1931)、《ソナチネ》、変奏曲などの古典的な形式に倣った作品においても見受けられます。

今はまだ音源も少なく、演奏会でも披露される機会が少ないという現状から、私は 2008 年 11 月にいずみホールにおいて開催予定の「クラブファンタジーのタベ」で、増永智子さんと共に、作曲者自身の編曲による 《ピアノ協奏曲 第 1 番》(2 台ピアノ版)を演奏致します。皆様に先生の作品を知って頂く機会になれば幸いです。

高野 雅子 音楽学部卒業生

#### スィング・バンドのための音楽作品—大澤先生の編曲作品

作曲専攻に進んだ私にとって、「作曲家がどう感じ音楽を創り出すのか」はとても興味深い。それは「編曲」についても同様だが、編曲という作業は一見容易なようで、奥が深く難しいものだと感じる。単に、旋律を何かの楽器に当てはめるだけではなく、「原曲の良さをいかに引き立たせるか」が重要だからである。

大澤壽人編曲《Pavane pour une infante d' enfunte パヴァーヌ》(自筆譜ではこの字)。先生がプロデュースされた「シンフォネットアワー」というラジオ番組のトップとラストの音楽用に作られたものだ。楽譜 1 ページ目には「スィング・バンドのための編曲」と英文で記されており、ジャズ風に作られていることが分かった。この曲が具体的に何年に編曲されたのかは定かでないが、戦後のアメリカ占領時代に先生が積極的にジャズ音楽を多数作曲されていることから、おそらく 1945 年以降に作られたものではないかと思われる。また、ラヴェルが全ての弦楽器を使用するのに対し、先生はヴィオラを省いた弦楽器群を使用している点も特徴的である。

ジャズ風に編曲された大澤先生の《パヴァーヌ》。この作品を通して先生の生涯を垣間見ることができた。

牛尾 晶子 音楽学部卒業生

#### 合唱曲にみるメッセージ —大澤先生の合唱曲—

大澤先生は、協奏曲や交響曲、管弦楽曲を始め数多くの作品を遺されていますが、ジャンルはクラシックに限らず、ラジオ用放送音楽、劇場音楽、シャンソンやジャズも作曲しておられます。また、大澤先生が神戸女学院大学音楽学部で教鞭をとられていた 1939 年から 1941 年、1948 年から 1953 年の間には、女声合唱を含む管弦楽を伴奏とする大規模な合唱曲が多く作られました。日本が第二次世界大戦の渦中にあっても拘わらず、1940 年に神戸女学院音楽部合唱団が大澤先生指揮により朝日会館にて演奏した《つばめに託して母のうたへる》や、神戸女学院大学 75 周年記念歌として作曲された《祈り》もちょうどこの時期にあたります。

《つばめに託して母のうたへる》は、第二次世界大戦中の 1939 年に作曲され、1941

年1月6日、大澤先生の弟さんの出征前夜に放送にて初演されています。家族が戦場に赴く前夜に初演されたことは、先生にとって非常に意義のあることであったと記されています。そして終戦を迎えて5年後の1950年に神戸女学院大学創立75周年記念として「祈り」が作曲されます。

幽玄の昔より 神の御手にあり 岡田山  
若き命の流れも清く 高き理想にゆく道を 一筋に学ぶ  
我らが 学園の齢を祝うこのときに  
讃えている歌声を  
聴こしめしませ おお神よ

藤田とき先生（在職1923-1953）作詞のこの曲は女声三部合唱で書かれ、讃美歌を思わせる美しい旋律とハーモニーに包まれています。

戦争を経験し目まぐるしく世の中が変化していく中で、先生は多くの合唱曲を作曲されました。楽譜の断片から、其々の曲に対する大澤先生の力強いメッセージや女学院への深い思いを感じながら作業を進めてまいりました。

田中 聖子 音楽学部卒業生

欧米の最先端から日本の最先端へー 大澤先生の主要作品を聴いて ー

大澤先生の作品には、「さくら」の旋律をモチーフとした曲があり、ソプラノとオーケストラのための「さくらの声」（1935）や、ピアノとオーケストラのための「さくら幻想曲」（1946）がある。

「さくらの声」はオーケストラ・ニッポニカの演奏によるCDがあったので聴いてみた。チューブラベルの柔らかな打音、ハーブの響きで始めると、フルートやオーボエが柔らかな旋律を吹き、最初は全然「さくらさくら」とは関係ない感じがした。そしてソプラノがヴォカリーズで声を聴かせたあと急激な盛り上がりを越え、そのあと「さくらさくら」「ふるさとの春の想い」「弥生の空に」などとオーケストラと一体となって歌い進む。日本語の歌詞で日本的ではあるが、実際は西洋の音楽ときれいに融合していて洗練された歌曲だった。この曲は、作曲者自身がピアノ伴奏譜にアレンジしており、2008年3月に演奏させ

ていただく機会があるため、譜読みを進めている最中だが、響きがとても現代的ですぐには手に馴染まない。しかし、不協和音が多くても決して不快感はなく、どこか耳に残る部分が必要だった。そして、ぐっと盛り上がっては退くということを繰り返し、最後はしっかりと2つの和音を響かせて終結する。

同じCDに《交響曲第2番》（1934）と《ピアノ協奏曲第2番》（1935）が収録されていたのだが、これはパリに留学中の作品で、帰国した1936年にすぐ日本でも演奏された。《交響曲第3番》や《ピアノ協奏曲第3番》と比べると、こちらの作品の方が非常にモダンな音楽だった。これらは27歳の時の作品で、若い大澤先生の才能が一番詰め込まれている作品だと思う。戦後には、《交響曲第4番》も構想しておられたようだが、楽譜の表紙が作られただけで一音も音符は書かれていない。欧州の流行の最先端をいく曲を作曲しようとしていたのか、または当時の日本の耳に合わせた曲を作ろうとしていたのか、それともまた違った手法を考えていたのか、非常に興味深い参考になる資料はまだ見つからない。

## ＜ベンジャミン・ディズレイリ・コレクション（10）＞

### 日本伝来のディズレイリの小説＞（最終回）

松村 昌家 大手前大学名誉教授

明治 11 年に丹羽純一郎訳『欧洲奇事花柳春話』（Bulwer Lytton、Ernest Maltverse と続編 Alice）が出版されて大変な人気を博した。以後 20 年代初めにかけて、リットン小説が矢継ぎばやに翻訳されてブームを呼んだ。

そんな翻訳ばやりの波に乗って、少なくとも次の 5 編のディズレイリ的小説が翻訳された。

1. 『政党余談春鶯囀』（関直彦訳、明治 17 年）
2. 『三英雙美政海之情波』（渡辺治訳、明治 19 年）
3. 『雙鶯春話』（牛山鶴堂訳、明治 20 年）
4. 『政海冒険大膽書生』（井上勤訳、明治 20 年）
5. 『昆太利物語』（福地源一郎、塚原靖訳、明治 21 年）

最初の『春鶯囀』については本シリーズで何回かふれたので、Coningsby の訳であることをご存じの方もおられるだろうが、残りの 4 編に関しては、おそらく見当もつかないだろう。『花柳春話』の影響で、あとにつづく西洋小説の翻訳には、原題とは関係なく、なんとなく人情的・叙情的ムードを漂わすような標題が好まれた。そして上記のリストにも見られるように、4 文字から成る角書つのがきが添えられることが多かった。そしてそれには、それなりのインプリケーションがあった。

『春鶯囀』の角書は、作者ディズレイリの政治理念や政治活動、そしてイギリスにおける政情などが翻訳者の関心の対象となったことをあらわしていると言えるだろう。そして『春鶯囀』は、日本において翻訳された最初の政治小説として歓迎され、かつ大きな影響を与えたのである

「春鶯囀」は、もともと雅楽・舞楽の曲名で、『源氏物語』「花宴」や「乙女」にも登場し、谷崎潤一郎の『春琴抄』にも取り入れられている。「春鶯囀自序」に「古楽の曲名既に此名あり。新編の訳述又此称を仮かる」とあるところから見て、この翻訳題名が雅楽に由来していることは間違いない。

しかし翻訳者関直彦の真面目は、この標題を美しいイメージを伴ったメタファーとして用いている点である。作品第 3 編で主人公コニングズビーがケンブリッジ大学を終えて、社交界に交わり恋をおぼえる青年期を迎えたさまを、「恰もあか春鶯の梅が枝に初音を告ぐるに彷彿さもにたり」と考えて、訳者はそれに「初音の巻」という題を添えた。そして第 1 篇を「溪間たにまの巻」、第 2 編を「雪消ゆきげの巻」とし、最後の第 4 編を「百囀の巻」と名づけたのである。

ビルドゥングスロマンの流れを汲んで主人公の名前をそのまま題名にした『コニングズビー』は、『春鶯囀』として翻訳されることによって、当時の日本の読者の情緒にマッチし

たロマンティックな政治小説に変身したのである。

神戸女学院大学図書館には、『春鶯囀』のほかにもう一つ貴重なディズレイリ小説の翻訳本がある。『三英雙美政海之情波』だ。原作タイトルは *Endymion* (1880)、ディズレイリ最後の作品である。1827 年から 1850 年（作者の政界デビューの時期と一致する）にかけての変動期を背景にして、ホイッグ党とトーリー党との対立、鉄道マニア、チャールティスト運動、オックスフォード運動等を含めた政治的・社会的な情勢がパノラミックに描き出されている。

物語は、主人公のエンディミオン・フェラーズが父の死後、強気で野心満々の双子の姉マイラーの支援によって政界に進出し、究極的には首相の地位につくようになるまでの人生航路を縦糸として構成されている。

エンディミオンは、作者自身をモデルにして造型された人物だが、彼の活動舞台にはナポレオン三世をモデルにして描かれたプリンス・フロレスタンやビスマルクをモデルにしたといわれるフエロル伯が登場する。これら 3 人の英傑が、すなわち翻訳題の角書にいう「三英」である。そして、ヒロインのマイラー・フェラーズと、エンディミオンの結婚相手として重要な役割を演じるベレンガリア（レディ・モントフォート）——この二人の美人女性が「雙美」によってあらわされている。マイラーは、ディズレイリの姉セアラを、そしてベレンガリアは、保守党政治家ウィリアム・ルイス夫人をモデルにして造型されたといわれる。ルイス夫人はのちに未亡人となり、莫大な遺産をもって、12 歳年下のディズレイリと結婚、レディ・メアリ・アン・ディズレイリとなる。

『エンディミオン』が『政界之情波』と目立った標題であらわされたのも、この小説における政界での女性の感化影響と関係があるのだと、柳田泉は指摘している。

折角の機会だから、残りの 3 点についても原題を示しておこう。3, 4, 5 はそれぞれ *Henrietta Temple* (1837)、*Vivian Grey* (1826–27)、*Contarini Fleming* (1832) の翻訳タイトルである。すべて主人公の名前から成る原題をこのような和風の標題に置き換えられているのは、当時における東西における小説の概念を考える上で、重要な手がかりになるかもしれない。

\* ベンジャミン・ディズレイリ・コレクションは神戸女学院大学図書館本館に所蔵しています。